

武庫川女子大大学院生、一般社団法人コアプラスの研修視察団を迎える

厳しく長い冬もさすがに3月の声を聞くと、これまでとは幾分違った柔らかさを感じる日も多くなった。春の息吹を先取りするように、この季節になると急に全国からの問い合わせや、入所希望が多くなる。またビバ卒業生からの電話やメール、直接の「里帰り」も増えてくる。

先週には、姫路市の森下神経内科診療所の森下一先生のご紹介を受けた青年を受け入れたが、この7日には東京からの青年を迎える事になっている。神戸市出身の現在札幌で生活しているビバ卒業生は、厳しい対人恐怖と戦いながら、「自分のことに精一杯すぎてビバハウスへの感謝の気持ちを表せずに居ました。でも変わらずに存在してくれていることが、心のどこかでは安心感としてずっとあります。」と書いてきてくれた。

メンバーたち一人ひとりも雪解けに負けない形で、中学校のクラブスポーツサッカー、リサイクルショップや特別養護老人ホームでのアルバイト、就労支援センターでの実習、北星余市高校への進学などにそれぞれ励んでいる。まさに春はもうそこまで来ている。

2月26日には大阪の一般社団法人コアプラス(武田緑代表)の企画・「教育とは何だっけ? IN 北海道」のメンバー8人が、北星余市高校とビバハウスの視察にこられた。この視察にはこれまで長くお付き合いをいただいている大阪高校生活指導研究協議会の佐藤功先生も同行されていたので、最近の若者たちの現状や新しい変化などについて心置きなく懇談が出来た。参加者の大半が教職志望の道内の大学生だったので、教師同士の共通の生徒観をどのようにして勝ち取ったのかの北星余市の実践には強い関心を持ってもらった。今回の視察が、教育の現場の分断と管理強化が安部政権の下でいっそう進められる中で、彼らの今後の活動に少しでも役立ってもらえればこれ以上の喜びはない。

引き続き3月1日には、兵庫県の武庫川女子大学大学院教育研究所の上田孝俊准教授よりのご連絡で大学院生などの方々を含む5名の視察団をお迎えすることになっていた。上田先生は、2011年10月に札幌で行われた「第1回日本臨床教育学会」でのビバハウスの実践報告を聞いてくださり、是非一度実際にビバハウスを見てみたいと思われていられたとの事であった。この大学院は夜間制で、院生の皆さんはそれぞれ現役の教育従事者との事も大変興味深かった。(残念なことに、上田先生は突然の事情で、前日の視察後に帰郷せざるを得ない事態になってしまったが、次の機会を切望されている。)

3月1日は北星余市高校の卒業式に当たっていたので、予定を変更していただき、全員で式全部に参加していただいた。女子のほぼ全員が日本髪に花嫁衣裳のような着物、男子の大半も、羽織袴やモーニング姿、会場に入るなり先生方の面食らったような表情が印象的だった。極めつけは、卒業生の答辞を述べた男子が突然ギターを取り出し自作の曲を演奏し出した事だ。北星余市の教育実践を基盤に、独自の形で、若者たちの相互作用によるお互いの成長を目指すビバの活動への熱く、暖かい共感を実感した。大自然

の中で農業を主体に自立支援を図る厳しさと喜びについても真剣に受け止めて頂いた。